

## 私の一冊

看護学科 佐橋徹 先生

アドルフ・ポルトマン著 『人間はどこまで動物か：新しい人間像のために』

小鹿図書館：469/P 83 (岩波新書 青版)

私は、看護学科で解剖生理学や病態学などを担当していますが、社会福祉学科と歯科衛生学科でも、講義を受け持っています。先頃、「私の一冊」のシリーズの執筆依頼がありました。実は、昨年すでに一度、依頼されていたのですがすっかり忘れてしまっていて、今年になって、改めて連絡を戴いた時には“これは困ったことになってしまった”と思いました。看護学科の学生のみならず他学科の学生諸君にも興味を持つことができる書物はないかと考えました。すると、数十年前に読んだ「この本」が思い浮かびました。何度も繰り返して読んだ訳でもないのに記憶のなかになぜか残っていた本が、この本です。

著者アドルフ・ポルトマンは1897年にスイスのバーゼルに生まれ、動物学、特に、鳥類の胎生学や比較発達学を中心に研究を続けた学者です。この新書は「ローフォルト・ドイツ百科叢書」の生物学部門の一部で、第1章の「生まれたての人間(新生児)」から始まり、「生後第1年」「人間の存在様式」「子宮外の幼少期」「生後第1年以後の発育」「老衰」という章立てになっています。

動物分類学によると、人間は脊椎動物(門)・哺乳(綱)・霊長(目)・ヒト(科)・ホモ(属)・サピエンス(種)に属する動物ですが、動物の常識からすると、かなり特殊な動物のようです。ポルトマンは人間の特殊性を、比較動物学の立場から指摘しています。彼は、動物を「巣に座っているもの(就巢性)」と「巣立つもの(離巢性)」とに分けました。生まれると直ちに、目が開いて、起き上がり、走り回ることができる仔馬などを「離巢性」をもつものとし、それに対し、鳥類のように、長い期間、巣にあって自ら食することもできない動物を「就巢性」を有する動物としました。霊長類は、元来、「巣立つもの」であり、よく発達した眼を持ち、生後第1日から運動可能なはずですが。この観点からヒトを見た場合、生まれたばかりのヒトの新生児はどうでしょうか？自力では動くこともできず、乳房に近づくこともできず、食べることもできずに、鳥のように全面的に両親に依存しています。まるで、子宮の中で臍帯を通じてすべてを母親に委ねている胎児のようです。ヒトは霊長目ではありますが“巣立つもの”とは、とても言い難い状況です。

生後1年を経て、ヒトは、やっと歩行を始め、言葉らしきものを介してコミュニケーションを試みたり、意思表示らしきものを表現するようになります。すなわち、ヒトは胎児の状態で出生し、

その後の1年間を母親は完全に自分の傍におき、強力な保護のもとに養育する仕組みを持っています。これをポルトマンは“生理的早産”と名付けました。

以上のような人間の特殊性を、ポルトマンは人間を動物学的な見地から眺め、次いで、心理学的、社会学的、歴史学的に、さらに哲学的にも言及して人間を考察しています。

「人間とは?」「自分とは?」という永遠の課題に対する時、古典的ではありますが、何らかのヒントを与えてくれる書物ではないかと思います。

最後に訳者の高木正孝についても書いておきます。彼は 1913 年(大正2年)に生まれ、東京大学を卒業後、ベルリン大学理学部心理学科へ留学して、ベルリン大使館の翻訳官を勤めている間に、ポルトマン教授とこの著書に出会っています。1945 年敗戦の後、妻であるスイス人女性と共に帰国し、神戸大学心理学教授になりました。留学中はヨーロッパ・アルプスの山々に挑み、その経験から、最新の登山技術と用具を日本に伝えています。そして、日本人初のヒマラヤ山脈 8000m 級未踏峰のマナスル登頂隊の調査隊に参加しています。その後、彼は当時、まったく知られていなかったパタゴニアに渡り、日本・チリ合同探検隊を組織して「パタゴニア探検記」を残しています。1962 年、45 歳の彼は、南太平洋での学術調査の途中、航海中の船からタヒチの夜の海に消息を絶ってしまいました。

ポルトマンの論文と共に興味のある男ではありませんか？